

「教材から哲学と教育を考える」

哲学教育への関心が高まりつつある中、今回の研究会では小学校、矯正施設、大学の授業実践から哲学と教育を考えることを目指します。いきなり哲学教育を問うことは難しいので、具体的な実践を核にした発表から問いかけていきます。公的な教育機関で実践するときに、どのようなことが障害になるのか。何ができて、何ができないのか。哲学教育で、会話や対話を導入することの意味とは何か。そして何をを目指すのか。さらに、そのような実践が教育にどのように貢献するのか。

- 日時：2009年12月19日（土曜日）、13：00～17：00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 大学教育実践センター教育研究棟1 2階
マッチング型セミナー室
- 主催：大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室

プログラム

- 発表（発表30分+質疑10分）
 - 13:00～13:40 「きく、はなす、かんがえる 西宮市香櫨園小学校の子どもたちとともに」
本間直樹（大阪大学／臨床哲学）
 - 13:40～14:20 「少年院における対話ワークショップの試み」
武田朋士（播磨学園）
 - 14:40～15:20 「哲学・倫理学の学校教育と〈コモン（共通）〉—大学での授業報告を中心に（仮）」
菊地建至（関西大学・京都教育大学など、非常勤講師）
- 休憩 - 14:20～14:40、15:20～15:30
- ディスカッション - 15:30～17:00
- 進行 松川絵里（大阪大学／臨床哲学）

● 発表者紹介

- 本間直樹：西宮市香櫨園小学校の先生方と協力しながら「子どもの哲学」の活動をされています。その活動からの発表です。
- 武田朋士：臨床哲学OBで、少年の矯正施設である播磨学園に勤めておられます。少年たちへの対話ワークショップからの発表です。
- 菊地建至：いくつかの大学で哲学・倫理学の授業でグループワーク、映像資料の導入など、特色ある授業を展開されています。その実践からの発表です。

